

お疲れ様でした

(株) 野生動物保護管理事務所
濱崎 伸一郎

WMOの草創期から屋台骨を支えてこられた岡野美佐夫氏と岸本真弓氏が4月末をもって退職されることになった。それぞれ入社後39年間と35年間の長きにわたるご活躍とご功勞に対して敬意を表すとともに、心から感謝の気持ちを伝えたい。

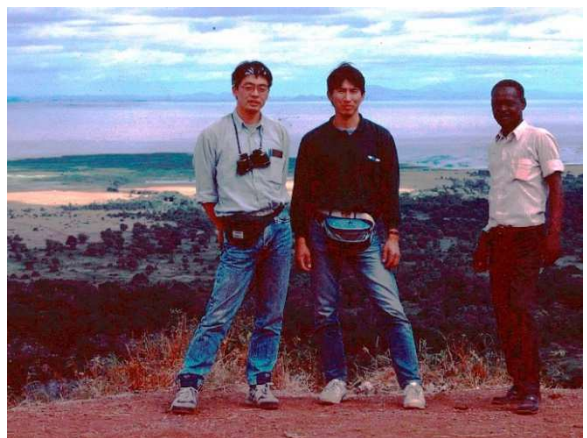
岡野さん

岡野さんは、北海道大学大学院文学研究科修士課程（行動科学専攻）を修了後、1986年に法人化前のWMOに入社された。私より3年先輩にあたる。大学時代から下北半島のニホンザル（北限のサル）を調査されていた関係で、WMO入社後も同地域のサルをはじめ、全国各地のサルに係る業務に従事されてきた。一方、私は主にニホンジカの業務に従事することが多かったので、岡野さんと現場をともにすることはそれほど多くなかったが、下北半島におけるサルの発信器装着作業や群れ追跡などでは、サル調査のイロハや生体捕獲技術を伝授いただいた。季節を問わず早朝から日暮れまでサルの群れ探索と追跡をしていたことが懐かしく思い出される。サルの生体捕獲に関しては、今でも会社で指折りの技術を発揮されているが、それは長年の経験に裏打ちされた群れの動きや個体の行動を先読みする能力によるものと思う。そのような能力は、一朝一夕にまねできるものではないが、これからも機会があれば、そのノウハウを後輩たちに伝えていってもらいたいと思う。

岡野さんは文学部卒ながら、プログラミング技術やパソコンの扱いに長けていて、その面での会社への貢献も大きかった。今でこそ、地理情報システム（GIS）のアプリケーションは業務で普通に使われているが、最初に会社を導入し、業務に活

用しはじめたのは岡野さんであった。2002年にはGIS情報解析室（現在の計画策定支援室の前身）の開設にも主導的な役割を担われた。また、サルの群れの目撃情報や聞き取り情報をもとに群れ分布を推定するプログラムも岡野さんが作成され、現在でも多くの地域のサルのモニタリングで活用されている。

さらに、岡野さんは1991年の株式会社設立時から会社の経営の一端を担われ、組織の充実と人材育成にも力を発揮された。会社設立時から第二研究室室長として、個性の強いメンバーをうまくまとめながら、サルをはじめとする調査、保護管理業務の幅を地道に広げ、現在ある業務の基盤作りに腕を振るわれた。また、堅実な経営方針を持つ岡野さんと放漫な経営方針の私とは、会社の経営や社員の採用方針などで、たびたび衝突することもあったが、今考えると、経営のたがを締める重要な役割を果たしていただいていたように思う。会社が成長する上でなくてはならない存在であっ



アフリカ研修時の岡野さん（左）と筆者
（1989年）

うんスリムでしたね

たことに今更ながら感謝したい。

岸本さん

岸本さんは大阪府立大獣医学科を卒業後、日本獣医畜産大学（現 日本獣医生命科学大学）の野生動物学研究室で博士課程を修了し、1990 年に入社された。私と同じ当時の第三研究室（宮本大右氏が室長）所属であったので、以来 35 年間、さまざまな業務で苦楽をともにし、困難を乗り越えてきた、私にとって最も信頼できる同僚であった。

WMOで初めての博士号（獣医学）取得者であり、入社時から野生動物の生理・生態に対する研究意欲は人一倍強く、タヌキに関する研究、さまざまな動物の生体捕獲技術やモニタリング技術、イノシシの保護管理などにおいて、民間企業にいらながらも卓越した業績を上げられた。また、日本哺乳類学会や日本野生動物医学会では、長年にわたって役員を務められ、多忙にもかかわらず学会の運営や発展に意欲的に取り組んでこられた。特に日本野生動物医学会では、早くに学会認定専門医の資格を取得され、生体捕獲技術の普及やアニマルウェルフェアの問題でも貢献されてきた。このような幅広い仕事を成し遂げてこられたのは、野生動物への深い愛情と保全に対する強い責任感があったからに違いない。会社における獣医学的な取り組みや、生体捕獲体制の礎も岸本さんが築

いてこられたといっても過言ではない。これまで関西地域のクマの錯誤捕獲対応では会社として多くの実績を上げてきたが、それも 2015 年に他界された西澤敦司氏の熱意と岸本さんの手腕に負うところが大きい。

思えば、1990 年代の某県のシカ調査では家具会社の倉庫で寝泊まりし、同時期の他県の調査では囲炉裏のある古い民家を借りて、それこそ同じ釜の飯を食いながら昼夜を問わず調査をしていた。先の見通しにくい時代ではあったが、最も楽しくひたむきに仕事をできた時期だったように思う。当時は現在のような会社の規模になることなど予想もできなかったが、関西分室（現 関西支社）にここまで多様で優秀な人材が揃い、社会に貢献できるようになったのも、ひとえに岸本さんの頑張りがあってこそその結果である。心から感謝したい。

お二人とも必死に走り続けた 30 数年間だったと思います。しばらくゆっくりと体も心も休めてリフレッシュしてください。ただ、まだまだ野生動物の魅力から離れることはできないでしょうから、野生動物の保全のために、また新たな形で力を発揮していかれることと思います。人生 100 年時代。お二人のこれからのご健康とご活躍を祈念します。本当にお疲れ様でした。



タヌキ生体捕獲調査中の岸本さん
(1992 年)
お～、生き生きしてますね



麻醉銃で標的を狙う岸本さん
(2007 年)
さまになってる